

読了しふと副題を改めて見ると、「3・11」と「生と死のはざま」の間に空白が入っていることに気付きました。本書は、3・11における金田諦應師（曹洞宗・通大寺住職）の目覚ましい活動の報告だけにとどまらず、「生と死」をめぐる随筆としても書かれているのです。以前から、著者は宮城・栗原に根ざした仏教者として、自死問題に向き合っていました。そこに3・11が重なり、いくつもの「死」、そして生き残った方たちの「生」と出会っていきます。

種類多くの特製ケーキ、暖かいコーヒーや冷たい飲み物、美しいお花やお香を仮設住宅に準備して、著者は仲間たちと「カフェ・デ・モンク」を始めていきます。単発イベントには決してせず、コツコツと回数を重ね、ただただ待ちます。すると、「苦しみや悲しみを通して吐かれる真理の言葉」を、涙や少しだけの微笑みの中で聴くことができる。魂の出会いがいくつもつづられています。「慈と悲で満たされた傾聴」であり、イエスの姿に通じるものです。

著者に直接お会いしたことはありませんが、私が被災者支援センター・エマオに遣わされた間にニアミスがありました。2014年に出演させていただいた「ラジオ・カフェ・デ・モンク」です。著者が企画したラジオ番組だったことを初めて知りました。

当時の録音を聞き直し、自声の聞き取りづらさに恥ずかしくなりました。けれども、「出会いによるお手伝い」「スローワーク」など、著者が本書で繰り返し分かち合っている内容と、不思議と共鳴しており、すぐにでも直接お会いしたくなりました。

本書を通して、私は「問い」も与えられました。3・11のような深い痛みを前にして、何ができるのか。何を祈るのか。

「私たち宗教者の役割は、それぞれの教義の安らぎに導くのではない。それぞれの物語が立ち上がるまで、揺れ動く心情と同期しながら、行きつ戻りつの長い時間を共に歩むことなのだ」

とことん「共にあること」にこだわる金田師の姿は、読者に「信じる者」としての新しい生き方を示すはずです。Ω